

その一 霧の摩周湖

「思いついたら吉日。決断と実行のその日暮らし」が俺たちの生き方。俺たちとは、守・二世（もり・にせい）と俺。小学生からの親友だ。

「二世」という名前には訳がある。彼には兄や姉がいたが幼くして亡くなった。少し経てから御両親は彼を授かったが、幼いころはひ弱で大病を患い生死をさまよった。そこで跡取りという期待を込めて「二世」に改名した。

守家は大阪でも指折りの旧家で大手広告会社モリ・PR・コーポレーションの社長は彼の父親。この改名がなければ俺と守は親友になっていなかった。何故なら、俺の名前が二世・守（ふたせ・まもる）だから。彼は立派に成長した。

俺は大阪でも指が折れまくる貧家の生まれでオヤジは紙芝居屋。だからと言うわけではないが絵が好きで、数学の入試問題で描いたグラフが芸術的だということとで高校、と言っても定時制（定時制の入試には人情加算があった）に入学できた。そんな腕を買われて部長格の守とコンビを組む「モリ・PR」で働く勤労学生だった。

俺たちは大学生だけど仕事の方が忙しい。今回も夏の北海道に仕事で来た……ことになっている。

大阪は春から始まった万国博覧会のまっただ中。会社は博覧会が始まるまでは大忙しだったが、その後は暇。大学も夏休み。日本中の観光客を集めて騒々しいが、地方の観光地では閑古鳥が鳴いてうるさいらしい。でも俺は閑古鳥の鳴き声を聞いた事はないし知らない

テントや寝袋とカメラや三脚などを積みこんだライトバンで摩周湖をめざす。ハンドルは守が握り、フォグライトを全灯しギヤをセカンドに固定して摩周湖へ続く砂塵の坂道を登る。

「晴れてるかなあ」とカメラをいじりながら俺。

「三度目の正直になればなあ」と守。

大阪から敦賀へ。運航が始まったばかりの長距離フェリーで北海道の苫小牧に上陸して摩周湖に向かったけど霧だった。俺は知床か野付崎へ行つた帰りに寄ろうと提案するが、何故か守は摩周湖にとりつかれたらしい。

「これが『摩周湖』やという写真、観た事、あるか？」

確かにそのとおり。高村光太郎の乙女像と十和田湖。ダムと黒部湖。大橋と琵琶湖。噴煙と阿蘇カルデラ湖。もちろん富士山と五湖。知っている範囲ではいずれもその湖を演出する役者が揃っている。苦もなく撮影できる湖ばかりが頭に浮かぶ。

一方、摩周湖と言えば晴れ渡った青空をバックに霧ひとつない鮮明な写真ばかり。「霧の摩周湖」と言うが「霧がない摩周湖」ばかり。

「だから摩周湖に来た」

守^守が撮^{キリ}りたいのは神秘の摩周湖。果たして神秘が奏^{キリ}でる演出に従うとは何を意味し、それはシャッターの限界内に収まるのか。

道が良くなつた。と言う事はまもなく第一展望台に到着するはず。晴れている。広い駐車場の展望台に一番近いところに車を止めて手早く三脚とカメラバッグを取り出す。勝手なもので今度は霧を期待する。

*

いつの間にか霧が出てきた。その量も濃さも理想的。偏向フィルターを微調整しながら撮りまくる。しかし、しばらくするとシャッタースピードは落ち、絞りを開放にせざるを得なくなる。風上を見上げると加速度的に霧が増える。増感撮影に切り替えるがすぐ限界に達する。川の流れをスローシャッターで捉えるような技は通用しない。

横を見ると守^守は三脚を立てずに撮影していた。あり得ない。

「白いお化けを撮^{キリ}つても金にならん。せめて第二展望台に行こうや」
でも、動かない。

「晴れる可能性は低いし第二展望台も占領されそうや」

繰り返し促すが動かない。状況に応じて機敏に行動する守^守にしては珍しい。

そうこうしているうちに、なにやら周囲が騒がしくなってきた。観光路線バスが到着して数十人の乗客が近づいてくるのがうつつすらと見える。どうやって摩周湖の天候を予想するのか知

らないが、晴れたら運行し、霧がでたら運休する。

「用を足しに」

守が霧の中に消える。

乗客の先頭集団からため息が聞こえる。時すでに遅し。今日の予想は「ハズレ」。摩周湖自体、霧に埋没。文字通り「霧の摩周湖」になった。

——三日も待たされた。簡単に見られてたまるか

とは言え俺もなすすべがないから、カメラをバッグに入れて三脚をたたむ。かなりしてから守が戻って来た。

「どうする？」

「もう少しだけ様子を見よう」

守は諦めない。そのとき女の音がする。

「あれ、守君と違う？」

「ほんまや。中学の時よりかっこいい！」

色黒の女が現れる。しかも二人も。そして声を揃えて「守君！」と叫んで前に立つ。

「あっ！」

どのような事態が起こってもうるたえないのに珍しく困惑する。それでも持ち前の対応力を見せる。

「久しぶり！ わあー、キレイになったなあ」

「えー！ ほんまに！」

二人は感動して跳び上がる。まったく反応しない俺に守は首を傾げながら続ける。

「中学の同級生、上町ウエマチと下村シモムラ……覚えてるやろ」

記憶がない。結局、霧の中でも「守は男前」と言う事が証明された。お互いまじまじと見つめ合うが霧ではつきり見えない。それでも美人ではない事ぐらいは判別できる。よくもまあ「キレイになった」と言えたものだ。

「あっそうか。二世は同じクラスになった事がなかったんだ」

霧の中だから寄り添うように距離を詰める。

「じゃあ、紹介する。えーつと、こちらが……」

霧で二つの黒い顔を判別できない。

「多分、こっちが上町さん。それに下村さん。そして二世」

「俺、二世、よろしく」

みんな苦笑いしながら頭を下げ合ってるのだろう。

「あのう……それから」と上町か下村が誰かの手を引く。

「東山ヒガシヤマさん。同じ短大の……三人で旅行してるの」

長い髪を真ん中で分けて、顔は卵形でおでこが広く目はクリッと、鼻筋はスーと……口元

はよく分からないが、なんとも言えないほどキレイ。中肉中背、長袖の黄色のセーターにジーパン。霧は関係なかった。なぜ、こうもはっきり見えるのか不思議だった。いつもなら真っ先にプレイボーイの守が興味を示すはずなのに反応しない。でもこの女子はまず守に頭を下げた。

「東山と申します」

「守です」

一言だけのあいさつで済まず守。何故かいつもと違う。ところが俺には挨拶の「あ」の字もなかった。すぐ上町と下村が中学時代の思い出話を始める。東山は黙ってるが、俺と守の顔を交互に何回も繰り返し見つめる。霧ではっきり見えないから、どちらが男前か確認しているのか。

勝ち目がない俺にチャンスが巡ってきた。しかし、霧は深まるばかり。

*

「霧だらけ。何も見えへん」

東山はバリバリの大阪弁でしゃべる。すぐ前を霧風に長い髪をなびかせて歩き出す。「落ちて着け」と自分に言い聞かせる。こんな時は始めから相手の事を訊くもんじゃないと。

「霧で見えなくなったけど、真ん中に島があるんや」

「旅行案内のパンフに載ってた。『中島』って言うんよね」

「神様が住んでるんやて」

「それも書いてあつたけど家、あれへん」

「家？ ……不思議な話があるんやて」

「それは書いてへんがった。家、あれへんのにどうやって住んでたんって言う話？」

「そうやなくて、流れ込む川も出る川もあれへんに湖面の高さが変われへん……不思議やろ？」

「当たり前やんか」

即答に戸惑う。

「出入りないんやから、増えもせーへんし、減りもせーへんやんか」

「そうやなくて、雨降つたら増えるやろ。カンカン照りやったら蒸発するやんか。せやけど、水面の高さが変わらへん」

東山は口を押さえて笑い出す。

「むずかしい事、言わんといて」

「女の子は頭が良いより悪い……」と言ってから「しまった」と口を塞ぐ。ところが平然と応える。

「やっぱり、ウチ、アホなんや。悩む」

「なんで」

「いつもそう言われるもん。せやけど、なんで水あるん。ほんまに初めから水あつたん？」

「うっ！ せやなあ……」

バケツは元々空だったと言いたいのだろう。一本取られたような気分になる。

「頭エエやんか」

「ほんまに？ ウソでもうれしい。もう一辺言うて」

すぐ反応できない。

「神様って、家もないのに、あんな狭いところでどうやって生活してるんやろ」

霧で何も見えないのに手すりがある方に歩き出す。

「そっちはマズイ！」

手すりの向こう側は断崖絶壁だ。霧に紛れて手を取ろうと近づくと距離感がつかめない。

「やめとこ」

振り返ったのだろう、すぐ目の前に顔があった。上目遣いの表情はまるで子供のよう。

「みんな、どこにいるんや」

「近くにいるはずやわ」

「守！ おーい、モリー」

「上町さーん、下村さーん」

返事はない。

「駐車場に戻ったんかなあ」

東山の方から俺の手を掴んでくる。調子いいと思うが足元がおぼつかない。つい先ほどまで周りはため息ばかりだったが今は静かだ。

「誤解せんといてね。好きで手、繋いでるんと違うんよ。心細いから」

心を掴んでは突き放し、また掴む。でも、さっぱりしたと言うか爽やかな感じがする。

「何か話して」

「せやな。霧が摩周湖を造ったんかも」

「そう！ ウチもそう思ってたん」

大阪のど真ん中での会話になっている。ここは摩周湖ではなく霧の道頓堀。しかし、会話は続かない。もう一度、守キリを呼んでみる。そのとき、突然背の高い女が霧を押しつけるように現れる。

「シャッター、押して頂けませんか？」

目の前と言うより鼻がくっついて息を共有できそうなのところにいる。

——夏子ナツコ！

間違いなく夏子だ。

——なんで、こんなところに？

半年ほど前、突然去った夏子……いつの間にかカメラを持っている。俺のではない。ライカの赤いロゴが——間違いなく夏子のカメラだ。

刹那の沈黙が突然の衝撃を受けた動揺で長引く。手を繋いでいた東山が俺と夏子の間にいた。夏子の身体が動く。余りにも視界が悪いからか、少し大きめの声で「ごめんなさい」と言いつて離れる。同時に東山が俺の手からライカをもぎ取って消える。一瞬の出来事だった。

すぐ「二世君」という声がしたので二歩近づくと東山とぶつかった。

「おっと」

「変な人。カメラ返しといたで」

——変な人？

「ウチが来るまで、晴れてたん？」

話題が変わって何故かホッとする。

「晴れてた。オタクが来てからや、霧になったんは」

「ウチが悪いん？」

東山の顔が目の前にある。

「ウチ、晴れ女やけど、生まれて初めて霧と勝負した。雨と違う。完敗や」

そして俺の肩を突いて笑うでもなく「変やったわ」と繰り返す。

「変やった？……」

「だって何も見えへんのに、写真なんか撮ってどうするん。綿菓子の写真をあとで食べるつもりなん？」

目と鼻の先にいるから戸惑う表情が見えるのだろう。

「でしょ。ウチ、顔に自信ないから、霧やったら、ツー・ショットOKや」

確かにカメラを渡してシャッターを……と言うのはあまりにも不可解。

「晴れてきた。駐車場に行ってみよか」

お互いの全身が確認できるほど霧が薄くなる。確かにキレイ。

「やっぱり、変やわ」

下手に応じるよりは——と一步身を引いたとき彼女が何やら差し出す。

「アメちゃん、あげる」

俺は引きつけ気味の顔に何とか笑みを載せる。

「顔面神経痛？ 変な顔」

包み紙を剥がしてアメ玉をくれる。

「大阪のおばちゃんや」

「違う！ お姉ちゃんや」

俺はまだ落ち着きを取り戻してない。頭の中では夏子が古い過去を引き出そうとする。摩周湖の霧のような不安定なスクリーンに、歪な過去を中古の映写機がカタカタと音を立てて再現し始めようとするからやるせない。

「これ魔法のアメちゃん。舐めると相手の気持ち、分かるん。ウチの気持ち分かる？」

次々と繰り出す突拍子もない言葉に戸惑う。

「ウチには二世君の気持ち、よー分かる」

——分かる？ 何を？ まさか夏子の事……それはあり得ない

東山はアメ玉を半分口から出して尖らす。どうやら口紅をさしていないようだ。だからアメ玉を出したり入れたりして舐めている。言葉が止まったのでダメ元で誘う。

「これからどうするんや？ 車で来てるんやけど一緒に旅行せーへんか？」

「すごーい！ 車で旅行してるんや」

「知床へ行くんやけど……」

「知床！ 行きたい！ 二人に相談せんと……ウチ一人でもつれてって」

飛び上がって喜びたいのを我慢して駐車場に向かう。さらに霧が晴れてきた。やがて上町の方から見つけてくれる。しかし、肝心の守がない。

「はぐれてしまったみたい」

かなり前から守が見えなくなったらしい。しかし、東山は気にすることなく二人に「知床行」を提案すると二人とも大喜び。一方、観光路線バスは霧が晴れたので出発を見合わせていた。

三人の意見がまとまったときその駐車場の方向から守が現れる。

「良かった！ 守くーん」

上町と下村が大きな声を上げて手を振る。東山は俺の横でじっと守を見つめる。

「知床行の話、俺から言ってもいいけど、直接頼み込んだら」

東山が視線を俺に変える。

「五人も乗れるん？」

「大丈夫。六人乗りや」

「良かった」

横で聞いていた上町が美英子に耳打ちする。

「言いくかつたらアタシから頼もか？」

東山は自信ありげに制する。

「言い出しっぺのウチから頼んでみる」

東山が守モリに近づく前に俺が先に近づく。

「どこに行つてた？……まあいい。ところで東山さんたち、お願いがあるようや」

上町や下村も笑みを浮かべて守モリを見つめる。そして東山が切り出す。守モリは一瞬ためらうような表情を見せたが、すぐ笑顔に変更する。

「旅の楽しみが何倍にもなるなあ」

東山が深々と頭を下げると上町と下村が歓声を上げる。

「わあ！ やったあ！」

東山は顔を上げると驚き気味の俺に悪戯っぽく笑みを浮かべる。なぜかボスのように見える。

その一 霧の摩周湖

いつの間にか、おんぼろ映写機は撮影機に代わって東山を追いかける。